

昨年12月に始まった子宮頸がんワクチンの接種。上腕に筋肉注射をする
(東京都新宿区の日本家族計画協会クリニック)

子宮頸がん予防接種始まる

中国地方の医療機関

子宮頸がんを予防するワクチン接種が中国地方でも昨年12月から始まった。原因となるヒトパピローマウイルス(HPV)は性交のみで感染し、性交経験のある女性の70〜80%が一度は感染する、ありふれた病原体だ。近年は若い女性の発症が急増しており、専門家は早期の接種を勧めている。

製薬会社によると、中国5県でワクチン接種を受け付けている医療機関は広島56▽山口13▽岡山72▽鳥根34▽鳥取31の計178カ所。民間のクリニックや病院を中心に広がっている。

子宮頸がんワクチンは、上腕への筋肉注射で初回、1ヵ月後、6ヵ月後の3回接種する。費用は計4万〜6万円の医療機関が多い。接種は10歳以上の女性が対象で、日本婦人科腫

瘍学会や日本小児科学会は、感染予防の観点から、11〜14歳への接種を強く推奨。中国地方の受け付け医療機関も、産婦人科や内科が7割の一方、小児科が3割を占める。

専門家 検診も呼び掛け

長は「欧米諸国では子宮頸がんは『予防するがん』としてとらえられている」と話す。ワクチンの有効期間は推定20年。諸外国では、HPV感染の可能性の低い9〜14歳ごろまでにワクチンを接種し、その後は定期的に検診を受けることが一般的になっているという。

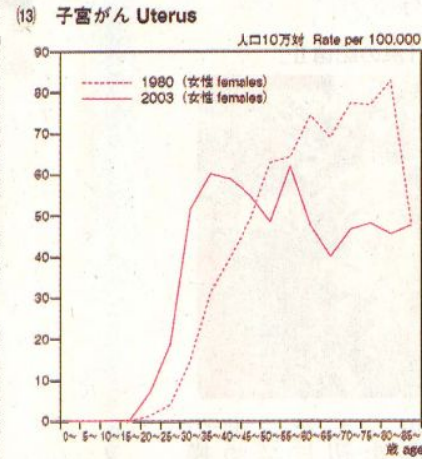
60年代に始まった集団検診で、発症・死亡率は大幅に減少した。しかし90年代後半に入り、発症率が再び増加し始めている。性交開始年齢が早まったことに伴う、HPV感染の若年化が主な原因だ。

一方、日本では、子宮頸がん検診は行政検診として20歳以上で受けられるが、年齢に限らず、受診率は低い。広島県内では全市町村が低く、受診率は低い。また、ワクチン接種も、この二つの型の感染を防ぐ。通常は感染しても症状はなく、体の免疫機能が働き1年以内に消失する。しかし、一部の人はHPVが潜伏し、感染して5〜10年後に発症するといわれ、子宮摘出や命の危険にかかわる。現在、子宮頸がんに加え6型、11型が原因の性感症、尖圭(せんげい)コンジローマも予防するワクチンの承認も申請中。

クリニック

ヒトパピローマウイルス(HPV)はHPVは100種類以上の型が確認されており、30〜40種類の型が性交で感染する。このうち、発がん性のある高リスク型は15種類ほどで、子宮頸がんなどの悪性の病気を引き起こす。世界的には16型、18型の二つの型が最も検出頻度が高く、約70%の子宮頸がんから検出される。日本で接種が始

また、ワクチン接種も、この二つの型の感染を防ぐ。通常は感染しても症状はなく、体の免疫機能が働き1年以内に消失する。しかし、一部の人はHPVが潜伏し、感染して5〜10年後に発症するといわれ、子宮摘出や命の危険にかかわる。現在、子宮頸がんに加え6型、11型が原因の性感症、尖圭(せんげい)コンジローマも予防するワクチンの承認も申請中。



年齢階級別の子宮がん(子宮頸がん)と子宮体がん罹患率推移(1980年と2003年)。20〜40代の年齢層で罹患率が増加している(国立がんセンターがん対策情報センターのホームページから)